「突っ張れ剛」（下）

金星獲得なかった

遊佐町の佐藤信さんから柏戸が若い当時の貴重な記事資料を頂いた。自らの少年時代、テレビ観戦の思い出として「優勝に関わる取組になると心配で見ていられず、家の前の公園に飛び出して、終わった頃に帰ってくることが何度かあった」と回想するほどの柏戸好きだったという。

記事資料内に「金星はゼロ」のくだりがあった。平幕力士が横綱相手に勝つことが「金星」だが「実力がつくにしたがってすぐ三役になり、平幕に落ちなかったので、金星のチャンスがなかった」と記されている。調べ直すと確かにそうだった。柏戸は平幕時代、横綱に3戦して全敗。相手は栃錦、若乃花、朝潮だった。ライバル大鵬は朝潮相手に金星が1つあった。

栃錦相手に5連敗

平幕時代に挑戦したが、三役昇進後も勝てなかったのが横綱栃錦だった。5戦したが突っ張りを封じ込められ、引っ張り込まれ、投げに屈した。「マムシ」と呼ばれた名横綱は組み止めたら最後、密着するように引きつけて、柏戸の腰を浮かせて何もさせなかった。

その頃の立ち合いは、仕切り線に手をつけることが〝決まり〟になっていなかった。柏戸が中腰ぐらいから飛び込むさまはまるで短距離選手の弾丸スタート。直後相手の体を起こして突っ張った。江戸っ子横綱・栃錦は「アイツは立ち合い駆けて来やがる」と形容し、警戒していた。

栃若時代を形成した名横綱に師匠・伊勢ノ海親方は柏戸を学ばせようと出稽古に行かせた。引退後は師匠・栃木山の「春日野部屋」を継承。その後、相撲界の本流・出羽海一門の総帥として、相撲協会理事長になった人物と縁ができた。現役時代の一番の縁は昭和36（1961）年初場所、大関として初優勝を飾った後、エールフランスから欧州旅行をプレゼントされ、同行してもらったことだ。栃錦はちょうど1年前、同じく初場所を優勝、先にパリ旅行を招待され、引退したこともあって水先案内人を願ったのだった。

帰国直後の羽田での会見。柏戸のマゲが粗いのは春日野親方から助けられた一時的な結び方だったため。左から春日野親方の勝子夫人、春日野親方、柏戸、伊勢ノ海親方

2週間の欧州旅行

2月7日羽田出発、22日帰国と約2週間の旅行はエッフェル塔、凱旋門などを観光し、ロンドンにも足を伸ばした。現地では柏戸のマゲとはかま姿が女性と勘違いされ「アー ユー アワイフ？（Are you a wife？）」と尋ねられたことが帰国後の会見で明かされるなど、ハプニングもあったが見聞も深まった旅行だった。両者の縁は続き、柏戸は栃錦の勝子夫人からの紹介があって後のセツ子夫人と知り合った。

4場所連続の三賞

柏戸は三役昇進後若乃花、朝潮の両横綱にも勝てるようになり、一度も負け越さず5場所で大関に昇進。昇進前は4場所連続三賞を獲得した。うち3回は技能賞だった。相撲における「技能賞」は舞の海や炎鵬のような業師が受けるものと一般の人は思いがちだが、突き押し相撲を追求する者が取り口を貫き、好成績を挙げた場合も獲得できる賞のものだ。師匠は1㍍88、122㌔の長身・柏戸の腰高という欠点に目をつぶり、弱い者と稽古させることで長所を伸ばし、攻めの相撲が到達点を迎えた。力士数15人前後の家庭的な小部屋だったことも幸いした。

ライバル大鵬は力士数80人を超える大部屋・二所ノ関部屋で兄弟子たちからの厳しい鍛錬に直面したが、それを克服し、柏戸同様、1㍍87（120㌔）の高身長に懐の深さを武器にスピード出世を重ねた。

戦後の高度経済成長を象徴するような見栄えする大型力士の台頭。柏鵬時代が日の出を迎えることになった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

稀勢は金星3個

○…スピード出世した各横綱の金星記録としては大鵬以外にも各1個ずつ獲得が多い。北の湖（北の富士）、貴乃花（千代の富士）、白鵬（朝青龍）らだ。武蔵丸は金星ゼロだが、入幕当時、在位していた北勝海、旭富士が晩年で休場が多く横綱との対戦がないまま三役以上に出世した。最近では稀勢の里が3個（朝青龍1個、白鵬2個）。また金星獲得最多は安芸乃島の16個。

次回掲載は1月12日付